

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13127

研究課題名（和文）20世紀前半のアメリカ文学における経済・ジェンダー・身体

研究課題名（英文）Gender, Economy, and Body in Early Twentieth-Century American Narrative

研究代表者

坂根 隆広（SAKANE, Takahiro）

関西学院大学・文学部・准教授

研究者番号：30755799

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：資本主義の発展は、人間の身体やジェンダー／セクシュアリティのありかたにどのような影響を与えるのか。そのような問題意識が、二十世紀前半に書かれた多くのアメリカ文学作品に通底している、という仮説のもとに、本研究はフィッツジェラルドやヘンリー・ジェームズといった代表的なリアリズム・モダニズム作家の小説を検証した。研究を通してその仮説の妥当性が確認されただけでなく、重要なアメリカ文学作品において、内面と外面、過去と現在（と未来）、プライベートとパブリックな領域、倫理性とユーモア、イメージと（表象不可能な）現実、といった様々な対立を構成する動的な「境界面」として身体が描かれていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ローカルな意味での学術的意義という観点からいえば、これまでほとんど論じられることのなかったフィッツジェラルドの作品の意義を明確にしたこと、『グレート・ギャツビー』というアメリカ文学を代表する作品について新たな解釈を提供できたこと、ヘンリー・ジェームズの重要作品について新たな視座から検証できたことが挙げられる。より大局的な社会的意義は、資本主義社会において、ジェンダー・セクシュアリティ、身体、自己の在り方がどのように交錯するのかという問題を考える際の一助となる材料を提供できたところにある。

研究成果の概要（英文）：How does the development of capitalist economy affect human life and its literary representation? Driven by that foundational question, my research explored the interplay between economy and gender in early twentieth-century American narratives, an interplay which, my project hypothesizes, has its most dynamic and complex expression in representations of the body. Addressing a wide range of literary works from naturalist and realist fiction to modernist narratives, I analyzed how the body operates as a conflicted site of interanimation between increasingly financialized economic practices (impelled in particular by the rapid rise in stock dealings and installment credit) on the one hand, and gender/sexual anxieties on the other.

研究分野：二十世紀アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 身体 経済 セクシュアリティ フィッツジェラルド ヘンリー・ジェームズ

## 1. 研究開始当初の背景

資本主義の発展と変容は、人間存在と文学形式にどのような影響を与えるのだろうか。この問いを出発点として、本研究は、資本主義経済が飛躍的な拡大と変容を遂げた 20 世紀前半の米国に書かれた小説を考察し、特に作品における身体、経済と、ジェンダー/セクシュアリティの関係の検証を目指した。

アメリカ文学における経済や資本主義の表象については、とりわけ 1980 年代以降、新歴史主義的な批評において優れた研究が行われてきたが、その多くは、自然主義文学または 19 世紀の文学を対象としていて、20 世紀前半に書かれたリアリズム小説やモダニズム文学における経済の問題を扱った研究が十分になされてきたとはいえない。資本主義や経済を扱った研究でも、個別具体的な経済的事象を考慮せずに、資本主義を大雑把かつ抽象的に「市場の論理の浸透」、「消費社会の勃興」、あるいは「文学の商品化」として捉える研究が主流であり、この時代の小説における貨幣や銀行、借金や投機行動や金融、労働(者)の表象に直接的に焦点を当てる研究は意外なほど少なく、経済と身体との相関関係についての研究はなおさら乏しいというのが現状である。

モダニスト小説における経済とジェンダーの相互依存関係を、一貫して身体に焦点を置きながら検証した特筆すべき研究は存在するが、そこで身体は、専ら労働と結び付けられている。伝統的なマルクス主義的研究では、身体はその物理性において把握され、価値の源泉としての労働と結び付けられる。しかし、近年、ジェンダーやセクシュアリティについての批評家によって飛躍的に発展した、身体をめぐる理論的考察が示すのは、身体は種々多様な言説や幻想が交差する、動的で可変的かつ重層決定的な「場」であるという事実である。

このような身体観に立脚するとき、経済との関係における身体を、いったん労働という枠組みから外し、生産とは直接関係しない、市場における分配や消費の局面における経済現象との関連において捉えることが可能となる。

## 2. 研究の目的

20 世紀前半の代表的なアメリカ小説において、貨幣、資本、借金、恐慌、商品や投機といった経済事象またはそのような事象をめぐる幻想・言説は、いかに身体という(幻想)領域に浸透するのか、さらに、そのような経済的事象・言説が、とりわけジェンダーをめぐる幻想とどのような関係を形成するのか。それをできる限り解明するのが本研究の目的であり、20 世紀前半のアメリカ作家が敏感に察知し掘り下げた、経済・ジェンダー・身体の相関関係を、作品・作家間の差異を確認しつつ、より包括的に理解することを目指した。

この時期のアメリカ文学を経済的観点から扱う批評は、「資本主義」や「経済」を概括的かつ抽象的に把握する傾向が強かったのに対し、本研究は、貨幣や株式投資、金融、債券、不動産、といった経済的事象を個別に検討し、その歴史的具体性を重視した。歴史的社会背景の正確で緻密な調査に立脚しつつ、作品を徹底的に精読することで、個々の経済的事象が、ジェンダーと相互に関係しながら、登場人物の身体、あるいは身体感覚のありかたを規定することを明らかにし、従来の研究にはない新たな視点を提供することを試みた。金融資本主義ならびに法人資本主義が急速に拡大した当時のアメリカ社会における人間や自己のあり方についての、文学者による深い反応を分析することで、新自由主義的な論理が浸透する後期資本主義社会を生きる我々自身のジェンダー・セクシュアリティ、身体、自己の在り方についての知見を得ることが、本研究のより大局的な目的である。

## 3. 研究の方法

経済と文学の関係を考察する研究といえば、マルクス主義批評によって重要な成果が得られているが、本研究の方法は、そのような批評を批判的に継承するものである。すなわち、基本的にはマルクス主義的なアプローチを採用することによって、経済や階級問題の歴史的具体性に配慮しつつも、本研究は、マルクス主義的言説そのものの歴史性にもまた細心の注意を払い、マルクス主義的言説を絶対化せずに、より柔軟なアプローチを試みた。

より具体的には、伝統的なマルクス主義批評におけるように、労働を絶対視あるいは理想視するのではなく、土地や自然と直接的にかかわるような労働を理想化せざるをえなくなるような歴史的状況や、登場人物、作者の心象の方を重視する。

それと連動して、ジェンダーや精神分析的、現象学的な知見を前提としながら、身体の構築性や幻想性を認めることにより、生産や労働と、分配(市場)の関係をより柔軟かつ複雑なたちで抽出する。従来のマルクス主義批評における労働の絶対的理想化を批判する、モイシェ・ポストーンによる労働についてのマルクス主義的理論は、そのような柔軟な方法の基礎となりうるものである。

本研究において具体的に考察対象としたのは、ヘンリー・ジェイムズ、イーディス・ウォートン、ウィラ・キャザー、セオドア・ドライサー、F.スコット・フィッツジェラルド、シンクレア・ルイス、ガートルード・スタインといった、20世紀前半の代表的作家である。本研究の方法上の一つの柱は、以上の作家による小説の緻密な作品分析であり、もう一つの柱は、そうして得られた作品分析の歴史的な文脈と理論的枠組みへの具体的かつ正確な位置づけである。

#### 4. 研究成果

本研究の成果については、第一に、最も直接的な成果である三本の論文、第二に、その具体的な成果を踏まえて、より包括的な視野から本研究が明らかにしたこと、第三に、本研究で見えてきた新たな重要課題と今後の展望、という要素にわけて述べていきたい。

まず、本研究の視点から様々な作品を精査するなかで、その重要性が浮かび上がってきたのが、フィッツジェラルドの後期の短編、“Financing Finnegan”である。作家としてデビューした当時から晩年に至るまで、フィッツジェラルドはエージェントや編集者、出版社からの主に印税を前払いしてもらうというかたちでの借金に依存しながら職業作家として生計を立てた。その様態は、特に自動車の普及に伴う分割払い制度の発達によって、負債を背負う人々が急激に増加した当時のアメリカ社会の文脈とも呼応しながら、短編、長編を問わず、フィッツジェラルドの多くの作品に、多様に反映されている。その中でも、従来の研究でほとんど着目されなかった、後期の短篇“Financing Finnegan”に本研究は注目した。多額の借金を背負い、私生活でも、職業的にも、非常に困難な時期にあった作者によって書かれた本作品は、自らの状況を自嘲的かつアイロニカルに描いたユーモラスな小品として理解されてきた。しかし作者の伝記的事情を考慮し、他方で、他の短篇と比較しながら読むことで、本作品には、(資本主義社会において)借金を背負う人間とはどのような存在であるのか、ということについての、作者の透徹した考察が埋め込まれていることがわかった。本論考では、(作家としての)倫理や、身体、約束といった、借金という問題との関係で必然的に重要となる主題が、どのように作品内で展開しているかを明確にした。

上記の成果をとおしてあらためて資本主義と20世紀前半のアメリカ文学を検討するうえでのフィッツジェラルドという作家の重要性が浮き彫りになり、その代表作である『グレート・ギャツビー』を、経済と身体、ジェンダーとの関連で再考察することが必要となった。本作品の再読によって本研究が新たに発見したのは、第4章において、ギャツビーと共に車でニューヨークに向かうニック・キャラウェイが、マートル・ウィルソンが給油する姿を目にする場面の重要性である。マートルの給油姿は、彼女の日常的な労働の姿を描いているが、ニックがとらえる彼女の充足した労働の姿は、作品における多くの疎外された労働と対比を成している。灰の谷の人々の活動やジョージの仕事だけではなく、ギャツビーやニックの疎外感や孤立に帰結する日常的な仕事を背景にしたとき、マートルの労働の姿は、作中におけるほとんど唯一の充実した日常的な労働の姿として浮かび上がる。しかし、彼女の労働が瞬間的にしか描かれなないことの意味は無視できないだけではなく、その意味を作品自体が問題化している。車から一瞥されるマートルの労働の姿は、すぐれて写真的な表象として提示されている。作品全体で強調される、事実の歪曲をもたらす表象装置としての写真を前提にしたとき、問題の給油姿は、(ニックの)上流中産階級的視線を通して美学化・審美化された労働の表象でしかないという、暗示的なメッセージが浮き彫りになる。だが、そうした表象の枠組みにはおさまらない現実らしさ、たしからしさがこの描写にはある。その根拠を探るために、本研究では、小説の草稿における、この描写の元となった場面を検討したところ、そこでは、マートルの生命力(vitality)とセクシュアリティと労働の密な連関であることが明らかとなり、この連関の痕跡が、彼女の給油の風景には残っていることが判明した。『グレート・ギャツビー』というアメリカ文学を代表する作品について、経済、ジェンダー、身体という観点から新たな解釈を提供できたことの意義は大きいと思われる。

マートルの身体は自動車事故という偶然と必然の織りなす瞬間的出来事によって破壊されるわけだが、以上の研究によって、当初は想定していなかったかたちで考察すべき問題として浮上してきたのが、資本主義的な感性と、自動車や写真メディアが体現する瞬間性や速度という時間の問題の深い連関である。その連関をさらに検討するのに有益な作品として本研究が新たに焦点を当てたのが、ヘンリー・ジェイムズによる『アメリカ印象記』である。急速に拡大する資本主義経済によって驚異的な速度で変化するアメリカの都市を再訪したジェイムズは、その近代化の過程で失われてしまった様々な個人的な空間を追悼し、そうすることで、変容する都市に建立されたパブリックな記念碑が体現する永続性や記憶を宙吊りにする。しかし他方でジェイムズは同時に、「個人的な空間」という概念そのものの虚構性もまた記述していく。つまり、資本主義がもたらす急速な変容のなかで「失われ」ていき、「追悼」されるべきものとして、プライヴェートな記憶や空間が、さらにいえば「自己」という空間が、逆説的に発見され「創造」されていく、というプロセスを『アメリカ印象記』は描いている。資本主義社会における喪失と創造、外面と内面、公的空間と私的空間、追悼と忘却という対立が、後期ジェイムズの作品においていかに弁証法的に展開しているかを明らかにした点に本研究の意義はある。

以上の具体的な成果もあわせて、研究期間全体をとおして見えてきたのは次のことである。つまり20世紀前半のアメリカ作家は、階級格差や信用経済の進展といった、資本主義を軸とする社会的経済的問題を、人間の外面的な社会生活の様式をこえて、記憶や時間感覚、倫理といった

「内面」のあり方を深く規定するものとして描いた。19世紀の小説に比べて、主観的な「内面」の表象へと傾倒したとされるモダニズム小説だが、通説的な解釈では、そこでの内面とは、急速に伝統を破壊して変化する社会や経済といった「外面」から切り離された、「内部」を作家が模索したものとしてとらえられてきた。本研究で明らかになったのは、重要な文学作品において、内面とは、むしろそういった外面との密な関係において形成され、ときには、その外面に深く媒介・規定されたものとして、またあるときは、外面との弁証法的な関係を結ぶものとして提示されている、ということである。さらに重要な知見として明らかになったのは、身体やセクシュアリティはそこで、外面と内面、外部と内部の「境界面」として描かれているということ、すなわち、内面と外面が相互に作用し、影響し、互いに定義しあう極めてダイナミックで複雑な運動が生じる場として描かれている、ということである。当然ながら、その運動の有様や傾向は作品間において異なり、拘束される身体、官能的な身体や、写真的な死体、あるいは空間そのものの身体性、といった具合に、多様な表象がなされることになる。しかし身体がそこで、プライベートな空間とパブリックな空間の境界、現在と過去と未来の境界、資本主義的な暴力と、管理社会的なケア、さらにはより親密なケアの境界といった、多層的な境界として捉えられ、同時に、その境界の動揺を体現する「場」として作用していることは共通している。多様な言説が交錯する「場」としての身体という仮説をもとに開始した本研究は、その仮説の正しさを確認するとともに、新たな知見を加えることができ、一定の成果をあげることができたといえる。

最後に、本研究をとおして明らかになった課題と、今後の展望について述べたい。本研究は、経済とジェンダー・セクシュアリティ、身体の交差を主な対象として続けてきたわけだが、調査をすすめるなかで、20世紀前半のアメリカ文学における身体と経済の結節点として、人種と奴隷制の痕跡の問題を認識するようになった。多くの重要作品において、経済的な問題とセクシュアリティをめぐる物語が交錯するところには、明示的にせよ暗示的にせよ、「黒人の身体」あるいは「黒い身体」をめぐる言説が、またあるときは移民の身体をめぐる幻想が深く介入している。本研究で明らかにした、様々な対立の境界面として作用する身体という場は、実は多くの場合、黒人や移民の身体をめぐる抑圧や暴力のうえに成立している。その抑圧と、抑圧の不可能性は、物語のプロットを駆動し、破壊するところまで深くと作品を貫いている。労働する身体が表象されるところでも、「労働」と称すべきかそのものが問題化される、奴隷労働を行う身体、という問題から切り離して考えることなどできないのではないかと、といった作者の問題意識が、多くの作品に垣間見られる。本研究ではこういった問題の所在を突き止めるにとどまったが、今後はむしろ、この人種をめぐる問題に中心的に取り組むことで、身体と経済をめぐる知見を拡充していく必要があるだろう。

さらにもう一つの課題として浮かび上がったのがキリスト教をめぐる問題である。資本主義の発展は社会を急速に世俗化したわけだが、改めて20世紀前半の作品を調査してみると、宗教的な超越性の痕跡、あるいは宗教的超越性への憧憬と呼ぶべきものが多くみられ、それは一方では貨幣や借金(負債)といった経済事象と、他方では内面や倫理をめぐる問題と密接に接続している。マックス・ウェーバーはプロテスタンティズムの倫理と資本主義の発展の親和性を解明したわけだが、20世紀前半の文学作品で描かれる資本主義社会においては、倫理をめぐる問題は、どのように人間は自己と他者の身体を統治し、管理するのが、そしてどのようにそういった統治や管理から逸脱し、それを克服するものとして身体を再定義できるか、といった問題として把握されている。そのような理路をとおして、身体や性をめぐる幻想に、直接的にせよ間接的にせよ、宗教的言説や幻想が深く関与していることが散見される。それと同時に、貨幣の超越的な身体性がキリストの身体性と類推的に捉えられる、ということも見られる。キリスト教的な言説に関する知見を深めることで、宗教的超越性(への憧憬)がどのように経済と身体の交差に絡んでいるかを今後検討する必要がある。

以上のように、いくつかの重要な課題も出てきたが、そうした課題の発見も含めて、本研究は全体として当初の目的を達成し、20世紀前半のアメリカ文学における経済・ジェンダー・身体の交差についての重要な知見の蓄積に成功したといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 坂根隆広	4. 巻 70
2. 論文標題 ユーモアと暗闇の弁証法：フィッツジェラルドの“Financing Finnegan”における借金，身体，貨幣	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 19 - 38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂根隆広	4. 巻 71
2. 論文標題 痕跡としての日常：『グレート・ギャツビー』におけるマートル・ウィルソンについて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 83-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takahiro Sakane	4. 巻 22
2. 論文標題 Mobile Monuments: Dialectic of Commemoration in Henry James 's The American Scene	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of American Studies	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 坂根隆広
2. 発表標題 借金の現象学 “Financing Finnegan” を中心に
3. 学会等名 アメリカ文学会関西支部
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂根隆広
2. 発表標題 痕跡としての日常：『グレート・ギャツビー』におけるマートル・ウィルソンについて
3. 学会等名 アメリカ文学会関西支部
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関